

講評

第17回公共建築賞 北海道地区審査委員会 委員長

北海道大学名誉教授
NPO 法人 歴史的地域資産研究機構代表理事
角 幸博



公共建築賞・
優秀賞

生活施設部門
(北海道地区)

東川小学校・東川町地域交流センター

本施設は、町の資源である大雪山国立公園の山並みと
呼応するように、大屋根とグラウンドが空間的に広がり、
外観も山並みと呼応する形態としている。

地域の主力産業である農業とのふれあいによる食育、
環境教育実現のため、施設の周囲には学校田、体験畑、
果樹園などを配し、栽培・収穫・加工・調理などの総合
的なアプローチを目指している。

開拓時代からの水田畦道を基準線とするなど、風景や
土地の記憶を施設計画に積極的に取り込んでいる。小学
校の単なる改築ではなく、地域の新たな拠点として、地
域ぐるみで将来の人材である子どもたちの教育の場とし
てのコミュニティースクールを形成し、学校と地域が連
携した教育プログラムや、学童保育を中心とした社会教
育を連動させている。

世界的な彫刻家・安田侃の作品や地元作家のアート作
品、東川町で製作されたデザイン家具の配置のほか、教
室の机・椅子などのオリジナル木製システム家具の新規

設計、随所に使用された地場の木製品の採用など、地
域とつながる豊かな校舎空間が提供されている。

地域に根付く学校施設の在り方と、地域の人が参画す
る公共施設のマネジメントという、これからの方向性を
示す好例といえる。



公共建築賞・
優秀賞

生活施設部門
(北海道地区)

訓子府町幼保連携型認定こども園 わくわく園

本施設は、老朽化した幼稚園と保育園を統合し、周辺
施設とも連携して子育ての拠点となるよう設立された、
幼保連携型の認定こども園である。

企画段階では、幼保一元化準備会を組織し、「こども
園基本計画」を作成し、設計者選定、設計、施工段階で
も、設計者、施工者、園関係者、役場、住民等の多くの

関係者により、「みんなでこども園をつくる」という共
通のコンセプトで、ワークショップ等により自らが望む
空間創出と運営が目指された。

園舎は、「はだしの庭」を中心に回廊でつなぐ構成と
なっており、0歳から5歳までの異年齢や障がいを持つ
園児らが、さまざまな遊びを共有しながら、「ふれあい」

や「たすけあい」が自然に生まれる空間となっている。園舎全体が木造架構を積極的に見せる意匠となっていて、高い精度の施工が実現されており、地中熱ヒートポンプによる床冷暖房システムの採用により、年間を通じた「はだし教育」が実現されている。

現在では当初の想定以上の園児数となっていることにも現れているように、施設と保育が一体となったこども園の運営が実現されていて、幼保一元化の成功例といえる。



公共建築賞・
優秀賞

生活施設部門
(北海道地区)

北海道札幌視覚支援学校

北海道札幌視覚支援学校は、北海道における盲学校の在籍者の減少や旧札幌盲学校と旧高等盲学校の老朽化による両校の統合により整理され、視覚障がいのある幼児児童生徒から国家資格取得を目指した高等部専攻科までの一貫した教育を行い、寄宿舎を設け安心して学べる環境が実現。全国唯一の理療研修センターを併設し、校内臨床実習による理療を通じた地域社会に開かれた特別支援学校である。

プランは、一文字中廊下型の南棟に主要教室をまとめ、寄宿舎、体育館、専攻科棟などの別棟が渡り廊下で垂直につながる視覚障がいの生徒に移動しやすく、分かりやすい配置となっており、教室、廊下を大きくゆったりと学びやすい環境となっている。周辺の住宅街に対し、敷地内で南側に低層の校舎（3階建）を配置し、周辺への日影の影響に配慮している。

建物外周4面の底下通路は、通年安全な歩行訓練が行われ、種々の床材を採用した4つの中庭や2階テラスデッキは、夏祭り等生徒の憩いと屋外歩行の感覚を養う学びの場ともなっている。

多くの生徒が寄宿舎を含め、寒冷な地で1年間24時間快適な環境をRC躯体蓄熱の外断熱工法で省エネルギー化も実現。構造体の長寿命化、再生可能エネルギーの利用で環境に配慮した建築となっている。

視覚障がいのある生徒にとって幼少から社会へつながるための充実した一貫教育が、生徒の視点で安全、安心で高い質の環境が創出されており高く評価できる。



地域特別賞

北海道地区

EBRI (エブリ)

北海道江別市の「江別れんが」は北海道遺産にも指定されるなど地域の財産である。当該施設は、市内に残るれんが造の工場が廃業後、市が土地建物を取得し、民間の資金と運営ノウハウを活用してにぎわいを創出するローカル商業施設として再生したものである。

旧工場建築物は、築70年以上経過し、長年、風景の一部として地域に親しまれており、れんが造建築物の時を経た潜在的な力強さと美しさを存分に生かすため、屋根形状や木造トラス構造を残しながら、新たに基礎や鉄骨造による構造フレームを挿入し、構造安全性に配慮している。

施設の開業後は、食をはじめとした地域の魅力の情報発信や人の交流の拠点として市内外から多くの人を訪れるようになり、工場跡の廃墟としてネガティブに捉えていた地域住民が、再生された空間に共感し、時を経た工場建築の力強さ、美しさと、その価値を再認識する契機

となっている。また、こうした機運の高まりから平成31年には国の登録有形文化財に登録されている。

当該施設は公共的な建築物を核に公民連携した地域づくりの好事例として大いに評価できる。



(受賞作品掲載は地区推薦順)